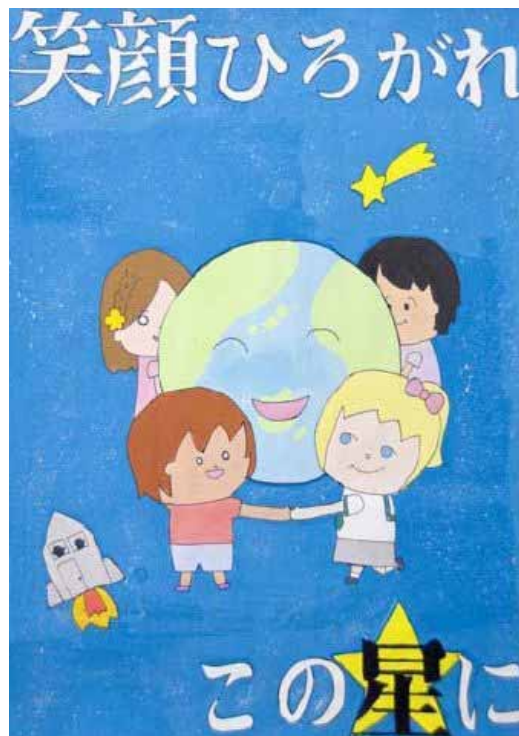


2012年度人権作品集



（「人権」に関するポスター（図画）選定作品 小学生の部 5年生）



（「人権」に関するポスター（図画）選定作品 中学生の部 2年生）

はじめに

名張市・名張市教育委員会では、日常の家庭生活や学校生活、社会生活などでの体験を通して実感された、人権を守ることの大切さや偏見・差別などの社会の不合理をなくしていくことへの思いを表現した人権作品を市民のみなさんから募集しています。

本年度も、小・中学校の児童生徒をはじめ、高校生・高等専門学校生・一般のみなさんから、「人権」に関する作文・標語・ポスター（図画）を合わせて一万三千七百三十九点もの応募をいただきました。フォト（写真）につきましては、残念ながら応募がありませんでした。

全体を通して見てみると、自分たちの身近な問題や、さまざまな体験を通して、人権の大切さをとらえ、自分たちの生活の中で差別をなくしていく行動に移していこうとする気持ちが現れています。日ごろの学校、地域等での人権・同和教育の取り組みの成果だと喜んでいきます。

この作品集には、応募いただいた作品の中から、作文十一点、標語十八点を掲載しました。

作文・標語は、様々な学習や日ごろの自分自身の体験を通して、差別の現実に触れ、その中から差別をなくすために、自分の問題として自分がどう行動すべきかなどが率直に表現されているものが多く見られました。

なお、ポスター（図画）については、二作品を啓発用のポスター及びティッシュとして活用し、標語については、二作品を啓発用ティッシュに活用します。

この作品集を通して、人権について考えていただいたり、差別に対する見方や考え方などを知っていただくとともに、さまざまな学習の場でご活用いただき、人権意識の高揚と人権・同和教育の一日も早い解決に向けて、一層ご尽力いただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、本年度、作品をご応募くださいましたみなさまに厚くお礼申し上げますとともに、来年度、より多くのみなさまにご応募いただきますよう心からお願いを申し上げます。

目次

作文

〈小学生の部〉

いつてよかった	(1年生)	4
「ことばでちゃんとつたえたい」	(2年生)	5
かた方の目	(4年生)	7
最高の仲間	(4年生)	8
私の妹　　(奥矢さんに出会って)	(5年生)	9
気づける自分になりたい	(6年生)	10
つながり合うことで・・・	(6年生)	12
人権のものさし	(6年生)	13

〈中学生の部〉

命の大切さ

(3年生) 14

人とのつながり

(3年生) 16

〈高校生・高等専門学校生・一般の部〉

私の居場所

(高校2年生) 18

標語

〈小学生の部〉 20

〈中学生の部〉 21

〈高校生・高等専門学校生・一般の部〉 21

いってよかった

(小学1年生)

Aくんがやすみじかに、わたしがべつの子とあそんでいるときに、なんかいいおかけしてきました。にげてもいいおかけきて、いやでした。なんでいいおかけくるのかなとおもいました。ほかの子たちは、大きいこえで

「やめてえ。」

となんかいいっていました。みんなは、やめてといいながらもたのしそうにしていました。わたしはたのしくなかったです。いやだったけど、やめてという力がありませんでした。いってよかったAくんがおいかけてくるとおもったので、いうきになりますでした。Aくんはわらっていて、たのしそうにみえました。でもわたしは、ぜんぜんたのしくありませんでした。こんなことがなんかいもありました。わたしは、Aくんのことがかよつといやになりました。

Aくんとは、入がくしてはじめてあいました。せきがかかったので、おはなしもするよつになりました。そのときは、たのしかったです。でも、ときどきわたしのかみのけをさわったり、ひっぱったりするのがちよつといやでした。いやだとおもっていただけ、やめてといえませんでした。Aくんにちよくせついいに

くかったし、そのうちやめてくれるかもしれないとおもったからです。だからわたしは、がまんしていました。

ある日、ママママにがっこうのことをいろいろおはなししていたとき、Aくんのことおはなしました。わたしは、おもっていたことをぜんぶおはなしました。ママは、わたしのおをみながらきていてくれました。おはなしながら、どんどんゆうきがでくるのがわかりました。このままだといけないとおもいました。ママとそうだんして、やめてとということにしました。いわないとわたしのきもちも、Aくんにつたわらないとおもったからいおうときめました。

つぎの日のあさ、ランドセルをかたづけからAくんのところにいきました。すこしきんちよつしたけど、Aくんのおをみてやめてほしいことをおはなしました。Aくんは、なんのこともよくわからないようにみえました。でもわたしがぜんぶいうのをちゃんと聞いてくれました。ああよかったとおもいました。そのあとせんせいにあったとき、わたしは、にっこりわらいました。

それからは、いやなことはありませんでした。ゆうきをだしてはなしてよかったとおもいます。

「ことばでちゃんとつたえたい」

(小学2年生)

「ほうか後いっしょにあそぼう。」

と、わたしはAちゃんに声をかけました。

「ムリ、ちゃんと、ちゃんと、ちゃんと、四人であそぶやくそくしたから。」

とAちゃんは言いました。わたしは先生に、

「Aちゃんにあそぼうって言っても、入れてくれへん。」

と言いにきました。先生がAちゃんに、

「Mちゃん(「わたし」の名前)こまっているんやけど、聞いて。」

と言いました。わたしが、

「ほうか後いっしょにあそびたい。」

とAちゃんに言っても、

「きょうはムリ、またこんど。」

と言っぱかりです。わたしは、「ムリ」と言われたのがいやで、す

ごくかなしくなつて、涙が出てきました。先生がAちゃんに、

「みんなであそんだらいいやんか。」

と言つても、Aちゃんはだまっています。先生がAちゃんとあとの

三人の子をよんで、わたしと話をしました。先生が、

「Mちゃんはおそびに入れてもらいたいの。みんなはどうする？」

と聞くと、三人は、

「いっしょにあそぶ。」

「みんなであそんだらいいと思う。」

「ぜったい入れる。」

と言いました。三人がそんなふう言ってくれてうれしかったです。でも、Aちゃんはだまっています。わたしはかなしい気持ちになりました。先生が三人に、

「もし、じ分があそぼうって言ってるのに入れてもらえないMちゃんの立ばだったら、どんな気もち？」

と聞くと、三人は

「かなしい。」

「入れてもらえなかったらいや。」

「じ分を入れてもらえないのはかなしいからいっしょにあそぶ。」

というる言いました。まだAちゃんはだまっています。わたしは、

「なんで入れてくれないんだろ？」

とすごく思いました。

その後、先生がAちゃんの気もちを聞いてくれました。その日の二十分休みに、わたしとAちゃんともうひとりの友だちと、あそぶやくそくをしていました。でも、Aちゃんとやりたいことがちがつて、わたしはもうひとりの友だちとあそびました。Aちゃんはそれがかなしかったみたいで、わたしたちがわざとやくそくをやぶつたと思つていて、それでわたしが「あそぼう」と言つたときことわつたことがわかりました。「ああ、そうだったんか。」と思いました。

先生がAちゃんの前で、わたしともうひとりの友だちに、

「わざとAちゃんとおそばへんかったん？」

と聞きました。わたしたちは、

「わざとじゃない。」

とはつきりと言いました。先生は二回も三回も同じしつもんをくりかえしました。私たちも、そのたびに、

「わざとじゃない。」

と気もちをつたえました。五回目ぐらいにAちゃんがわらいました。二十分休みにいっしょにあそべなかつたのは、わざとじゃない、ということがAちゃんにつたわりました。

その日のほうか後、わたしたちは六人でAちゃんの家の前であそびました。いろいろなあそびをしました。六人ですごくなかよくあそびました。みんなであそべてよかったです。二人か三人であそんでいるより、人数が多い方が楽しかったです。

ことわられたままかなしい気もちで家に帰るより、先生に言うてよかったです。なんでAちゃんがことわったのかわかつたし、わたしたちがわざとAちゃんをはずしたわけじゃないこともわかつてもらえて、なかよくあそべました。じ分の気持ちをことばでつたえるって、本当に大切だなあと思いました。これからもかなしい気もちになったとき、だまっていなくてちゃんとつたえていこうと思いました。

かた方の目

(小学4年生)

わたしの母は、目がかた方見えません。でも母は、子育てもして、車も運転できて、前はかんこしとして病気やけがをなおす手助けをしていたすごくかっこいい人です。

わたしが母の目がかた方見えないと知ったのは、わたしが三さいのときでした。でも、「ちゃんと生活ができてすごいな。」と思いました。五さいになると、だんだん母のことが分かるようになっていました。それからずっと、車の運転をしているとき、目が見えない方から人が来ると、じこにならないように、「ママ、人来るよ。」と言ったり、「ママ、よこに物があるよ。」と教えています。

父もそんな目を気にせずに結こんで、なかよくくらせています。学校でさべつのことを勉強しました。それは、「ガイジ」ということです。わたしは、「ガイジ」ということがどういうことか知りませんでした。でも、わたしの友だちのAちゃんやBちゃんのことをさべつすることばで、「ガイ」はしょうがいの「ガイ」で、「ジ」は兄どうの「ジ」だと友だちの話をきいてわかりました。そして先生が、言われた人だけでなくしょうがいがある人やその家族もみんながくやしい気持ち、つらい気持ちになることばだと言いました。

そのときわたしは、母が前に話してくれたことを思い出しました。「ママはね、小さいころお友だちがいなくていじめられてたの。マ

マのお母さんもお父さんも仕事で夜中までいなくて。でもね、りえんちゃん、いじめられたら、すぐ先生に言ってね。ママはいじめられたけど、先生に言わなかったから！」ということでした。

だからわたしは、

「わたしの近所の人で、かた方の目が見えない人がいるんだけど、その人は家族のおせわも家のことも車の運転もなんでもかた方の目でちゃんとやっているの、そんなさべつはしないほしい。」と言いました。

そして、家に帰って母に、「今日ママの目がかた方見えなかったことを言ったんだけど、『ママが』って言わずに、『近所の人』って言ったよ。」と言つと、「そういうときは『ママ』って言っているよ。」と言いました。次の日先生にそのことを言ったら、「お母さん、すごく元気になんでもひとりやってくれてすごいね。」と言ってくれて、わたしも母もうれしかったです。友だちにも話しました。

さべつすることばを言っている人は、自分が言われたらいやだと思っけど、ほんとうにしょうがいがある人はもつとつらい気持ちになるので、意味も深く考えないでかんたんにそういうことを言わないでほしいです。もし友だちのAちゃんやBちゃんや母がそういうことを言われたら、わたしは心のそこから、「やめて」とさげびたい気持ちです。そんな気持ちを大ぜいの人に伝えたいと思っています。

最高の仲間

(小学4年生)

ぼくは、一年生のころ、最初はほとんど友だちがいませんでした。ぼくは、人に悪口を言ったり、人をたたいたりしたことがあります。それで、ぼくは、友だちとけんかをしたこともあります。悪口の言い合いになって、けんかになってしまいます。でも、けんかをしている間に、心の中で「あやまらな。」と思って、あやまると、「いいよ。」と書いてくれて、心の中までうれしくなりました。その時気づいたことがあります。それは、前よりもっともつとなかよくなっていることです。けんかしていた友だちも、さっきのおこっていた顔がうれしそうな顔になって、ぼくもうれしかったです。ぼくは、たくさんの友だちができて、とてもうれしかったです。一年生の二学期には、もうたくさんの友だちができてうれしかったです。

ぼくは、三年生のとき、もうこの言葉はぜったい使わないと自分にやくそくした言葉があります。それは、「死ね」という言葉です。すぐくむかっているときや、遊び半分で、ときどき使ってしまった、相手をきずつけてしまいました。

ある日おじいちゃんが死んでしまって、ぼくは、死んだ人のその式をするのが二回目でした。一回目は、ひいおばあちゃんのその式であまりいっしょにいるときがなかったけど、悲しかったです。けれど、おじいちゃんるときは、なががよくて、ほとんど毎日いっしょにいて、いっしょにごはんを食べたり、公園や買い物につれて行

ってくれた人が、急に死んでしまって、いっしょにいた人とおわかれするということが、ぼくはとても悲しくて、わかれるのがとてもつらくて、ぼくはなみだがとまらなかつたです。大切な家族や友だちが死ぬということは、二度といっしょに遊んだり、話をしたりできなくて、悲しいということだとわかったから、ぼくは、もう一生「死ね」という言葉は使わないといちかいました。

ぼくは、今でも、悪口を言ってしまったたりしているけど、ぼくは、日々そのくせを直そうと努力しています。ぼくには、今、ぼくのこを「すごいなあ」と言ってくれたり、しんどいときに心配してくれたりする友だちがたくさんいます。友だちとは、遊ぶだけじゃなくて、ささえ合って助け合うことが本当の友だちだと思います。

ぼくにとつて、友だちは、家族と同じくらい大切で、とてもいい最高の仲間だと思っています。友だちがいなかったら一人ぼっちの悲しい日々をすごしていたと思います。ぼくは、「友だちっていいな」と心の中からすごく思います。

人権ポスターに、ぼくは「みんな助け合いささえ合う仲間」と書きました。人間は一人じゃなくて、たくさんの人たちと助け合い、ささえ合ってみんなで生きていくということと、友だちはささえ合い助け合う最高の仲間という気持ちをこめたかったからです。

今の友だちは、ぼくにとつて最高の仲間であって、一生大切にしたいとも思います。これから、ぼくは、友だちといっしょに遊んで、友だちとの仲をもっと深めたいです。

私の妹　　〽奥矢さんに出会って〽

(小学5年生)

私には五才はなれた妹がいます。妹には障がいがあります。ダウン症です。みんなよりも発達がおそいと聞きました。妹が生まれた時、お母さんは泣いていたそうです。「こんなにかわいいのに、どうして泣いてるの?」と私はお母さんに言ったそうです。その時、お母さんは「そうやな」と私の言葉で、無事生まれてきただけでいいことに気づかされたそうです。

妹が生まれてくるまでは、障がいという言葉を知りませんでした。ある日、目に障がいがある人のテレビを見ている時私は、

「障がいつてかわいそうやな。」

と言いました。するとお母さんは

「障がいはかわいそうじゃないねんで。幸せは、自分が決めるからそんなことないねんで。」

と言いました。その時私はまだ五才だったけど、五才なりに考えてみました。目が見えないだけで、かわいそうになるっておかしいことだなとも思います。お母さんの話を聞いてから、障がいのある人もない人もみんな仲良くやっていきたいと思っています。

人権の授業で、奥矢さんというお姉さんがきてくれました。奥矢さんは、視野がせまく見える範囲がすごくせまい障がいです。最初奥矢さんが目の障がいだと全然わかりませんでした。私もわからなかったし、多分みんなわからなかったと思います。駅などで人ぶつかることがあり、おこられたりするそうです。周りの人には奥

矢さんの障がいわからないところが、難しいと思いました。でもいろんな人と、いつしよに勉強したり遊んだりすることが、いろんなことを知ることにつながると感じました。

奥矢さんの話で一番すごいと思ったのは、友達の話です。奥矢さんは、大学に入るまで自分の障がいがいらいで「死にたい」と思ったり、「なんで自分だけこんな障がいを持って生まれてきたんだろ」と思っていたそうです。そんな思いをもちながら、大学である友達に出会いました。その友達は「算数が苦手なこと、障がいは同じ。だから、助け合うのは当たり前」といったそうです。それを聞いて私は、「友達ってだいじやな」と思いました。

来年妹が小学校に入学してきます。妹も友達と仲良く遊んだりできたらいいなあと思います。でも、もし妹のことをわかってもらえなかったら、私が妹のことをわかってくれるように話をしたいです。

私の将来の夢は「のびのび学級の先生」になることです。なぜのびのび学級の先生になりたいと思ったかというと、妹が行っている育成園や、学校にいるのびのび学級の先生を見てなりたいたいと思いました。障がいのある子ども達に、やさしく教えたり、いつしよに遊んだりできる先生になりたいです。そして、私も妹も、奥矢さんに負けないくらい元気に明るく生きていきたいです。

気づける自分になりたい

(小学6年生)

僕の父は目が見えません。家でも物や半開きのドアにも当たっていて、思い通りに行動できません。外出する時は、慣れていく駅までは行けませんが、白杖が必要です。

僕が小三の頃、父に「一緒に行くか。」と言われ、初めて父と二人で外出しました。父は左手を僕の右肩に置き、右手で白杖を持ち、僕と一緒に歩きました。小さい時から母の様子を見ていたので、歩く時に気をつけることは分かっていました。今も父と一緒に外出する時は、父の足元を見て、「段があるよ。」と伝えたり、人にぶつからないように「ちょっと止まって。」とか「左によつて。」「右によつて。」と言ったりしながら歩きます。

父は、体に障害がある人と友だちで、よく話をしに行っています。また、運動が好きなので、障害者の運動会にもよく参加しています。僕も一緒に行ったことがあります。僕は父が出る競技の集合場所に連れて行ったり、お茶を渡したりしています。運動をしている父の表情はとても明るいのです。ゴルフも趣味でやっています。もちろん付き添ってもらっています。コンビニでお弁当を買った時も、売っているお弁当の中身を一つひとつ、父に伝え

て選びます。

僕は、父と一緒によくいろいろな所に行きますが、たまにじろじろと見られたり、にらまれたりすることがあります。「この時、僕には思うことがあります。体の不自由な人と自由な人とは、人の価値が変わるのでしょうか。見える人と見えない人との格差はあつていいのでしょうか。見えている人には、決してしないことを目が見えない人にどうしてするのでしょうか。これは、僕のを考えたから、正しいのか違うのかは、今は分かりません。

僕は、父と一緒にいることで、障害のある人たちとの交流が多いです。そのおかげで、親しくなった人も多いし、学んだことも多いです。そして、いろいろなことに気づきました。でも、気づいたからこそ、もっと気づける自分にならないといけないとも思いました。

気づくためには、交流することが大切だと思います。クラスの中で、勉強が分からず困っている人がいたら、やり方を教えてあげることや、給食の後片付けで忙しそうにしていたら手伝ったりすることもあります。そのたびに、「ありがとう」と言ってくれ、僕の心はとてもうれしくなります。反対に、体育の組体操で技の順番が分からない時は、友だちに教えてもらったこともあります。

一人でできないことも、二人、三人とたくさんの人がいれば、
できることは、世の中にはたくさんあります。父との生活や父の
友だちとの交流で学んだことです。僕は父のいる家に生まれて良
かったと思いました。こんな大切なことを気づけたからです。こ
れからも父に肩を貸したように、たくさんの人に僕の手を貸して
あげたいです。

つながり合うことで・・・

(小学6年生)

私は、人権総合学習で、いろいろな人に出会って、人に対する接し方など、いろいろなことが変わりました。例えば、相手に何か物を拾ってもらっても、何も言わずに受け取っていました。だけど、今は「ありがとう。」「と言つことで、たくさんの人々とながれるということを知ったので、何かをしてくれた時には、しっかり「ありがとう。」を言うようにしています。また、自分が何か悪いことなどをしたら「ごめんね。」「とも言つようにしています。

「共感・つながり・想像力。」「この三つの言葉は、人とのつながりをよりよくしてくれると藤原先生に教えてもらいました。私は「共感」を大切にするために、しっかり人の話を聞いて、あいづち(反応)をしたり努力しています。「つながり」を大切にするには、暴言をはかないようにし、人に言って相手がうれしくなったり、気持ちよくなったりする言葉を言うように努力しています。暴言をばいってしまったら、あやまるようにもしています。「想像力」を大切にするためには、何をしたらこの後どうなるか、何をしたら友だちによるこんでもらえるかなど、先々のことを考えて、行動したり発言したりして努力しています。私は、たくさん努力をすることで、たくさんの人とながれて、よりよい絆が生まれていくと思うので、たくさんいろいろな努力をしたいです。それで人とのつながりを増やしていこうと思います。

私は、人と一番接することができて、人とながることができ

と思うのは、あいさつです。あいさつでも、適当に「おはよう。」「と言うのではなくて、ちゃんと気持ちを込めて笑顔であいさつすることで、相手とながることができると思っています。そして、一日が気持ちよく過ごせると思っています。「おはよう。」「と言って返してくれなくても、毎日言うことで、次第に返してくれるようになって仲よくつながっていけるようになると思うので、毎日気持ちを込めて、笑顔であいさつをみんなができるようになったら、すこくつながりが深まっていくと思います。

私は、「共感・つながり・想像力」と「努力・あいさつ」を大切ににして、友だちや地域の人、いろいろな人とながり(関わり)をもつていこうと思います。何か良いことをしてもらった時は、「ありがとう。」を、何か悪いことをしてしまったら「ごめんね。」をしっかり言えるようになるうと思います。

そして、自分の言いたいことを言ったら、友だちの言いたいことも聞いて、いろいろなことを解決していこうと思います。

友だちや、いろんなところで困っている人がいたら、見て見ぬふりをしないで、ひと声かけて助けていこうと思います。差別をしている人がいても、見て見ぬふりをせず、ちゃんと注意して、差別を少しずつでもなくしていこうと思います。

人権のものさし

(小学6年生)

社会見学で、奈良県の西光寺に行つて、清原さんに水平社と差別の話をしてもらった。

清原さんの話を聞いて、世の中にはまちがったものさしを持つている人がいることがわかった。人はまちがったものさしで、人と人をはかつて、差別が生まれる。差別をなくすためには、まちがったものさしを正しいものさしにかえていかなければならない。正しいものさしを持つていたら、人と人を平等にすることができる。まちがったものさしを正しいものさしにかえていくためには、人と人が認め合うことが大切だと思う。人と人が認め合えば、自然にまちがったものさしは正しいものさしにかわると思う。

また、差別によつて命をなくしてしまうことがあることを知つた。差別がそんなにおそろしいものだと、思わなかつた。差別は、人を死においこむものだと思つた。

清原さんの話を聞いて、自分自身のことを考えてみた。

五年生の冬、雪合戦をしていた。その時、Aさんだけに集中して、雪を投げた。何人かの子が投げたので、いつしよになつて投げた。その時は、おもしろ半分、雪をいっぱい投げた。Aさんの気持ちも考えず、ひたすら投げた。

清原さんの話を聞いた今考えてみると、Aさんは、ぼくより勉強ができないと思つていた。声が小さくて、何を言っているのかわか

らないときもある。Aさんの言うことを聞く気もなかつた。席が近い時、プリントを見られた気がして、Aさんのことをいややな思つていた。こんな気持ちをもつていたので、雪を投げたと思う。その時のぼくは、まちがったものさしでAさんのことを見ていた。また、その時はAさんに行つて、差別だと思つてもいなかった。まちがったものさしから差別が生まれることを知つて、ぼくはAさんのことを差別していたと思う。これからは、自分の中にあるまちがったものさしを正しいものさしにかえていきたい。

みんなにはいろんな個性があるから、勉強ができるとか運動ができるとか、自分のまちがったものさしで、人を下に見ないようにしていきたいと思う。また、友だちの悪口を言つていたり、ひそひそ話をしたりしている子がいたら、まちがったものさしからしていると思うので、とめたいと思う。そのためにも、まちがったものさしを見ぬく力をつけたい。

ぼくの中にある自分では気づかないまちがったものさしをかえていくために、友だちが注意してくれたらすなおに聞いて、なおす努力をしたいと思う。

命の大切さ

(中学3年生)

私は、職場体験学習でみさと園という老人ホームに行ってきました。その日の体験内容はお風呂の介助でした。私も介護福祉士の方と利用者さんを介助しました。手や足に障がいをもっているため、ねたきりの状態でお風呂に入れるのは大変でしたが、介護福祉士の方達が笑顔で仕事をしているので、とても楽しく体験することができました。その光景を見て私は障がいの事を考えていました。

障がい者とは体や精神になんらかのハンディキャップをもっている人の事です。私は今までどのように接してきたかという「目をそらす」ことで距離をおいてきました。あまりじっと見てもしまうと失礼な感じがして今まできちんと向き合った事がありません。でもふと考えてみるとこの行為は障がいのある人から目をそらしているのと同じ状況でした。

老人ホームで、最初はそうじや物を運んだりする事ばかりでしたががきりがつくと何度か「コミュニケーション」シヨンの時間が与えられました。しかし私は、はずかしくてなかなか利用者さんとふれあうことができませんでした。「コミュニケーション」シヨンがとれたとしても

なかなか内容が伝わらず、話がとぎれてしまうことが多々ありました。私はどうしたらうまく接することができるのか考えていました。そんな時、利用者のAさんが「あめ玉がほしい」と私に言いました。はじめて頼み事をされたのでとまどいもありましたが、職員のある方に伝えると「わかった」と言っであめ玉のあるところを教えてくれました。なんとか伝えられてホッとした気持ちと小さなうれしさでいっぱいでした。それは、はじめて声をかけてもらえた喜びでした。毎日友達から話しかけられるのとは比べものにならないくらい喜びがありました。その日以来、Aさんは私に会うとニッコリ笑ってくれたり、たびたび話しかけてくれるようになりました。最初はとまどいもありましたが、とても接しやすくなりました。人と心が通じあう事でこんなにも楽しいんだなと感じました。それから接する機会が増えた私はたくさん利用者さんと心を通じあわせることができました。そして自身心が変化した部分もあり、「この職場体験を通じて、介護福祉士さん、看護師さん、お医者さん、食堂のみなさん等、みさと園で働く人達がチームとして一人一人の利用者さんを支え、たくさん信頼関係を築いているのだなと感じました。一人では何もできないけれどみんなで協力すればこんなにも違うんだなと思わされたし、私の障がい者への見方や考え方がたくさん変化しまし

た。今まで距離をおいてきましたが目をそらすのではなく向き合
つていきたいと思います。そしてできるだけ多くの人に障がい者
の方とふれあってもらって私のような喜びを少しでも感じてもら
えたらなと思います。障がい者と話すことは確かに勇気も必要だ
し、心が通じあうには時間が必要です。でもふれあうことで変わ
る事もあると思うし、心を通じあわせることで生まれる力もある
と思います。私も最初は不安だったけど、とても話しやすい人達
でした。問題は私達自身が作っている心の壁なのです。私の学年
にも障がいのある女の子がいます。その子は私に会うといつもあ
いさつをしてくれます。私はその子から学ばされることがたくさ
んあるし、私はその子と過ごす日々が大好きです。

私はこの経験を通じてもっと医療の仕事につきたいと思いまし
た。今はとても医療が進歩していて、それについていくにはたく
さんの知識が必要ですし、その勉強は、とても大変だと思いま
す。でも、たくさんさんの命を救う手助けをしたいし誰かを支える力にも
なりたいです。私が将来仕事につくまではまだまだ時間がありま
す。その間に、困難な事も多くあり、厳しい道だと思っていま
す。私は大きな病気にかかった事がなく、健康に過ごしてきまし
た。もちろん家族に大切に育ててもらえたからだだと思います。障
がいをもって生まれた子も親に大事に育てられています。命ある

もの例えどんな状況でも大切なのはみんな同じです。だから、私
は命の大切さをしっかりと理解してたくさんの人とのつながりを
大事にしていくつもりです。だから医療という道をけっしてあき
らめたくはありません。この職場体験でその思いがもっともっ
強くなりました。その人が「障がい者だから」といって距離を
おくことは同じ人間として間違っている事で、共に生きること
一番に考えたいです。なぜならば人は誰でも、生まれながらに
て自分らしく幸せに生きる権利をもっているからです。

人とのつながり

(中学3年生)

自分は今中学3年生ですが、中学校生活はとても充実していて楽しい毎日を送っています。わかりあえる仲間と泣いたり笑ったり、ケンカをしたり。厳しいけれど多くのことを教えてくださり自分たちの行く先の道を照らしてくださいる先生方。時々うるさいなあと思う時もあるけれどいつでも守ってくれる安心できる家族。多くの人とつながって、多くの人に囲まれて、守られながら少しずつ成長しているのだと思います。

そんな毎日の中で今強く心に残っていることは、滋賀県大津市でおきた中学2年生のいじめ自殺事件です。同じ中学生として、とてもショックで色々なことを考えてみました。新聞報道を読めば、毎日同じ相手から一方的に様々な暴力や嫌がらせを受けていたようです。いじめの内容は読み進めていくほどぞっとする内容ばかりでした。この事件のいじめの内容をみて吐き気がするほどの嫌悪感を抱きました。これほどひどい一方的な暴力を子ども同士のけんかや遊びと捉えていた学校に大きな憤りを感じました。色々な事件が起きるときによく自分の周りでも起きないとは限らないと思うことがありますが、この事件は自分の周囲では起きないと確信していま

す。自分の周囲の大人や友達はこのまで勇気のない人たちではありません。ただ、いじめがエスカレートする一番最初の状態はこまでひどくはなかったと思います。もっともっと早い段階で止めることはできたと思います。いじめがあったことは多くの人たちが知っていたのに、なぜ、周りの生徒や教師は止めることができなかったのか。このことに関わったすべての生徒、教師、家族に責任があると思います。知っていたけどいじめに加わってはいなかったなどという言葉は言い訳にすぎないと思います。周囲の人たちすべてが加害者だと思います。そういう意味では警察の事情聴取をすべての生徒が受けたりしても当然のことだと思います。この事件の徹底的な説明が必要だと思います。

いじめをなくしていくことはとても難しいことだと思いますが、どこかで止めることやエスカレートする前に解決してしまうことはできると思います。大津の事件は被害者の命が失われなければ解決しなかったとすればとても悲劇的なことだと思います。命をかけるなくてもいじめは防がなければなりません。家族、学校、社会全体の中にいじめをすることは最低なこと、してはいけないこと、というような空気をいつも持っていられるようにしなければなりません。一番小さな単位である家族がいつでもこのようなことを話し合っていないといけないと思います。実際、家族の中でこのよう

な話題を、持ち出せず話し合うことのできない子どもはいじめているか、いじめられている可能性が高いと思います。

加害生徒について少し考えてみました。彼は、自分が一番だと思っていたのでしょうか。それとも家族の中で被害にあっていたのでしょうか。少なくとも家族内に力の関係があったと思われる。そうすると、加害少年も被害者といえるのではないのでしょうか。それならば、加害者は親、大人ということになります。育てられたようにしか育たないのだとしたら、一つの家族の中で永遠に悲劇的な状況が繰り返されることになります。自分はそれだけではないと信じています。人間は環境の動物ですから、家庭環境から受ける影響はとても大きなものがあると思いますが、だからこそ自分たちは学校という場で多くのことを学んでいるのではないのでしょうか。決して家庭環境がすべてではないと思います。学校という場の中で友人を得、先生方と出会い成長していけるのだと思います。

自分は最近防災サミットin三重「中学生」という集いについてきました。とても勉強になりました。多くの中学生が集まって話し合う場は大切だと思いました。まだまだ未熟な子どもですが中学生同士で集まって話し合う場はとても大切で必要なものだと思います。この経験はいじめの問題を考えたときに自分に一つのヒントをくれました。ありきたりなことかもしれませんが集まって、顔

をみて話をする。相手の話を素直に聞く。人間ができるとても大きな能力だと思います。事件を知った時に感じた嫌悪感やサミットに行ったときに感じた繋がりあうことの大切さという思いを忘れることなくこれからの毎日に生かしていきたいと思います。

私の居場所

(高校2年生)

私は小学校の頃から、人権学習には熱心に取り組んできました。でも、小学校の頃は部落差別なんて意味が分からなくて、「住んでいるところで差別するなんておかしいやん!」と、反差別の意見は出していただけ、どこか他人事でそれ以上の学習はしていませんでした。

中学にあがり、あることがきっかけで、部落差別は私の中で他人事ではなくなりました。友達二人がみんなの前で、「自分は部落出身や」と言ってくれました。二人は「今は差別を受けたことはないけど、将来受けるかもしれないから不安や。」と言っていました。それまで友達が悩んでいたことを何も知りませんでした。そのとき初めて、二人を不安にさせているのは周りにいる私たちなんだってことに気づきました。それからは必死で二人を支えようと今まで以上に学習に取り組みました。伊賀地区部落問題を考える中学生の集いの副実行委員長もし、委員会では毎日学校で一緒にいる友達より強い、深い関係を築くことができました。何でも話せて相談できる、頼れる仲間ができました。そんな関係は学校にもありました。学校から集いへ行くメンバーには、今まで喋

ったことがない、関わりの少ない子もいました。けれど回数を重ねるうちに、一番信頼し合える仲間になりました。私は二人を支えるために学習していると思っていました。しかし、気づくと二人を含め、多くの仲間が私の周りにいました。そして知らない間に私がみんなに支えられていることに気づきました。

そんなメンバーでしたが、進路先の高校はみんなバラバラになりました。でも一つだけ約束したことがあります。「高校へ行っても学習は続ける。」

私は高校にあがり、中学に比べ人権学習の時間がほとんどないことを知りました。だから私がクラス、学年を引っ張っていかないと決めました。しかし今まで横には多くの仲間がいた環境から一人になり、何をしたらいいのか全くわからず、聞いてくれるかな?とか、難しくとらえられへんかな?とか、不安で押しつぶされそうになっていました。そんなとき、ある友達がこう言ってくれました。「離れてても仲間やで。」この言葉で本当に、支えられているなあと実感しました。離れていても心は繋がっている。いつでも傍らには仲間がいる。みんながいるから、私はクラスの前で作文を読むことができました。今年の夏、部落解放全国高校生集会在三重県で開催されました。私は地区で学習しているレベルズの仲間と一緒に参加しました。地元で開催される全国集会

のために、参加者の事前の学習会が何度も開かれました。本番が近づくにつれ学習会での話し合いの中身もどんどん深くなってきました。学習に対し、涙を流して語れるかっこいい先輩たち、私と同じ悩みを持つ先輩や先生。私が考えたことのなかった悩みを持つ先輩とも出会いました。今まで知らなかった考え、そして何より、今しなければならぬ自分の課題をたくさん見つけることができました。

私はそれまで何でも話せて、間違っていることは注意し合えるのが本当の仲間だと思っていました。でも、それはレベラーズ先輩が言ってくれた一言で間違っていると気づきました。「人間やねんから何でも話せやんのは当たり前。でもそんな悩みを言いたいと思えるような場にしてほしい。」その通りだなと思いました。ただ仲間の悩みを全部聞くことが、自分にできることだと思いません。

レベラーズは私の居場所です。この場所があるから、私は学校の学習で一人でも怖くないし、頑張れます。私にとって全国集会は多くの事を教えてくれました。知らなかった自分、傍らにいた友達の知らなかった考え、そして同じ悩みを持つ仲間の存在。全国集会を通じて自分の考えがすごく広がって、成長できた気がします。

今、学校では居場所どころか学習にさえ、取り組むことができません。一からのスタートだけど、学校で新たに、自分の居場所をつくり、支え合える仲間を築いていこうと思っています。全国集会へ行くまでは諦めていました。でも私には仲間がいます。居場所があります。だからもっと頑張ります。まずは一人でも、本当の仲間と呼べる関係を築きます。そしていつかは、みんな心の底から笑ってまた出会えるような、そんな社会を築きたいです。

標語

〈小学生の部〉

- ・人はみな ささえ合って 生きていく
(5年生)
- ・おふぎで そんなつもりが いじめうむ
(5年生)
- ・「ありがとう」 まほうの言葉 広げよう
(5年生)
- ・友だちが言ってくれた「大丈夫？」 次はわたしが言いたいな
(5年生)
- ・みんながくれた思いやり 今度はぼくが返す番
(5年生)
- ・あなたが私の宝物 私があなたの宝物
(5年生)
- ・ありがとう あの時 一緒にいてくれて
(6年生)
- ・笑顔はね 心のとびら 開くカギ
(6年生)
- ・「ありがとう。」 笑顔になれる合言葉
(6年生)
- ・あなたの勇気は あの子を笑顔に変えられる
(6年生)

〈中学生の部〉

・勇気こそ 自分を変える 第一歩

(1年生)

・「ありがとう。」「きみがいたからがんばれた。

(1年生)

・まわり見て 小さなサインも 見逃すな

(2年生)

・差別はね 思っただけでは 止まらない

(2年生)

・ひとりで つながる絆 「ありがとう」

(3年生)

〈高校生・高等専門学校生・一般の部〉

・「ありがとう」 心がつながる 愛言葉

(高校1年生)

・伝えよう 自分の気持ち 受け止めよう 相手の気持ち

(高校1年生)

・あいさつは してもされても いい気持ち

(高校1年生)



人権作品集

2013年2月発行

名 張 市

名張市教育委員会

この冊子は再生紙を使用しています。